

令和3年城下町「からつ」俳句コンクール応募句総評

令和3年の城下町「からつ」俳句コンクールは、新型コロナ自粛下の状況下にも関わらず、326名の方より360句の応募をいただきました。その作品の中から、太閤秀吉が描いた天下統一の夢を重ねて詠んだと思われる福岡県古賀市の多田恵子さんの「万緑や海と陸^{くがす}統ぶ唐津城」の句が特選となりました。応募いただいた作品の多くは日頃、俳句に接していない方々が、旅先の唐津でたまたま投句箱や投句用紙を目にして、旅情のつれづれに、投句を試みたと思われる作品が多くみられました。

観光客の来唐地域は地元唐津を除く九州・沖縄地区が圧倒的に多く、次いで関東・信越・北陸・佐賀県・唐津市内・近畿・東海・中国・四国・北海道・東北・海外の順になっています。投句をいただいた男女の比率は、男性53%・女性47%と男性が多く、投句をいただいた場所は、天守閣に次いで・城郭内・旧唐津銀行・旧大島邸の順で、投句の年齢層は20歳未満の若年層が多く、次いで60歳・70歳と続き20歳・30歳に次いで40歳・50歳となっています。小学生や幼児の投句も多く見られましたが、判読不能・意味不明の句が見られ選の対象とはなりません。唐津城の修復はまだ続いており、完成までには今暫くの月日を要すると思われ、GoToトラベル自粛の日々は今後も続くと思われしますので、日常生活の衛生と健康に留意してコロナ終息の春を待ちたいと思います。

俳句は五七五の韻を踏み、四季の移り変わりや、人生の機微を詠む日本古来の定型詩です。一句の中に季語が入り、「切れ字」と称される「や・かな・けり」は一句に一つ、という暗黙の約束事があります。松尾芭蕉や与謝蕪村、正岡子規、高浜虚子の先人たちが、その指針を示す作品を多く遺しています。読む人に感動や共感を与え、鮮明なイメージや映像の浮かぶ句を志したいと思います。当たり前の事を当たり前に詠んでも、俳句にはならず、単なる言葉の組み合わせや報告に終わってしまいます。そこに俳句の醍醐味や奥行があります。梵鐘の音の如く翳々の余韻を曳く俳句を詠みたいと思います。

城郭修復の日を待ち、コロナも終息して、平穏無事な日々を鶴首して、次年度も沢山の観光客を迎え、郷土唐津を句に詠んでいただく事を念じて総評に代えます。

令和4年2月

選者 日本伝統俳句協会 評議員

ホトギス・花鳥・同人

唐津観光俳句会会長 田邊虹志 記